冬山･雪崩遭難救助訓練　　佐藤　伸也

■山行年月日:平成 30 年 2 月 4 日
■メンバー:佐々木健臣　国分勉
　大竹幹衛　大竹尚子　須藤夫妻
　外島正明　栗田光基　斎藤憲一
　杉崎圭洋　窪田道男　佐藤伸也

会津美里町にある小山スキー場に道に迷いそうになりながらなんとか到着。リフトもなく我々以外に誰もいないのどかなスキー広場だ。9 時にはほぼ全員が集合し上部へスキーで移動を始める。

最初は、会の備品である昔懐かしいアナログ式のビーコン 10 台を用いて機材の点検と操作方法の確認を行った。実際に捜索訓練をしてみると警告音とランプだけが頼りで、地点の確定にかなりの時間を要してしまった。

次に各自が持参したデジタル式のもので操作訓練を行った。この機種は方向や距離表示が明確で操作しやすくアナログ式の半分以下の時間で現場を確定でき埋没の深さも把握できるのも心強い。さらに、フラッグ機能で複数の埋没者の捜索もスムーズに行うことができた。雪崩遭難の生存率が 15 分後で 92%、以降は急激に下降することを考えればデジタル式ビーコンは雪山の必需品といえる。（アンテナ数で性能や価格に差があるようだが・・・。）

遭難者の位置が確定しても、引き締まったデブリを掘り進めるにはかなりの時間を要することも考えられるため、雪崩発生後すぐにプローブ、スコップを取り出せるようにしておく必要がある。左手にビーコン、右手にプローブを持つことになるので、スコップを肩掛けできるようにしておくことで迅速な捜索活動が可能になることとプローブでの感触の慣れも救出速度の短縮になることを学んだ。

昼食後は、救出直後に二次雪崩を避けるために負傷者をいかに迅速に安全な場所へ移動するかについての議論と実践を行った。担架を作ることは時間的に現実的ではないことから、雪面に広げたツエルトにザックを敷きその上に負傷者を乗せて包み、四隅をスリングなどで固定し雪面を滑らせるように斜め下方に移動させることが最も有効であるという結論に達した。この方法でも 3～4 人いないとかなり厳しく、深雪での状況での実効性にやや不安を感じた。

山岳会 60 年の歴史の中で雪崩による大きな事故はないものの巻き込まれそうになった経験を持つ会員も少なくないだろう。ビーコン、プローブ、スコップの三種の神器を常に持参することは仲間を思いやる登山者として当然だが、

何度も登っている山だからといって油断することなく、常に危機意識を持って山に臨むことが大切である。前日の降雪量、気温、雪質、地形など様々な要素が複合的につながって雪崩を引き起こす。巻き込まれない知識と経験から来る危機回避能力の育成に加え、万一のための心肺蘇生や止血法の技術の習得の必要性を痛感した１日だった。

【雪崩遭遇時の対処法】

（参考：ヤマレコ）

１．　大声で叫ぶ：注意喚起と位置確認で初動捜索を迅速化

２．　横方向へ逃げる：雪崩エネルギーの小さい方へ

３．　荷物を体からはずす：荷物は人下部へ引き込む。

４．　雪の中でもがく：何もしないと沈む。

５．　停止直前にエアポケットを作る：空気の確保